源氏物語巻

十二

東野文庫

源語恐草卷之四

目錄

柏木
鈴虫
沖法
白宮
竹川
椎本
横笛
夕霧
幻
紅梅
橋姫
総角

內閣文庫

かしの木

古歌つ智恢ミ古り給りで年をこえぬ年知みもあづく
ても見ふ一筋の叶いぬの世ふあるかひもあり 猶ふ源ふ
ちこれ古りぬ身ぶ和こうこうぶらこ女三の宮の市たち
にも京ふく紅ぶ源の四にくこもうにう新ぶ一とふ
四くふ氏信日死んこそよろこかめ猶もみもの松ふぬ
方ふ身ぶとるて惜むべきものと見ひ例ぶけて梅
ふへう少し市公ちよとて親遠云ふひまふ女
四ふて女三の宮へ古り給ふ今の殿にあり給ふと仏の
にと同世ふ四ぬも理り給ふ殿と書て

今はとてこそ心細くもなりぬれ
小侍従女三の宮に参て今はこゝろの友にて侍まゝ
思ふ人〻せき籠りとてこそ侍ふらひすめれ女三の宮
こそ心ぼそけれ侍やとゝ思ふまゝ
とあるさまを小侍従柏木に見せまゐらせて柏木ふるせをまれがたの
思ふ人〻こそ世の思ひ出なれと侍ひてゆめ〻
行末あさ〻の烟と成ぬとも思ふあらぬ方にまじ
小侍従小宰相のうさ海ども。さぞ〻ゆゑ今ゆゑよ人をはやし
さやぶらん。かくうばつに成ぬまゝ多けるものの若かりしを

女三の宮をあはれ〻と思ひ出でよりやく侍りあるとてめ人〻ぬ
女三の宮は今はの時より姫の四十九日あるまで悩ませ給へど源
氏の君ふかうとゝ申ふ人〻ばかりまうでべい
給る事なくてとて所〻の人〻どもあるかぎりの
かたち〻宮の内ふさぐ所こゝふ隅〻の僧たち
修法始させ給ふ一度悩ませ給ひて日〻ふるほどふ
若君は生まれ給へる君は源氏の君の薫
ゝゝぬ物ふまれだ。ゆゑ〻ふ柏木ふ能ゆてもゝ所〻ばかり男も
人ふかくまぬふ。ゆゑ〻ふよく似ゆゑ〻不審ふ思ひ
人〻ばかり移ふ氏ゆゑ氏ゆゑにことに若君にて生れ給へば

ことの外よろこび誰もかくしてよやめでたがれど源ち
うきくとも枝ひめうぐ女三の内侍妊(くるし)の因さ海ぐ三ちよや
思て悩みがちにおの〳〵けはしが内侍の後も内ちよろ
つぐよりぐ変ぬをもさうめさうれが内命もいやうし
はなちにかこけいうはそて居ふ為むとおぐて源は
さ内侍ゆえをかがふ居ふ故あるで中〳〵て形よくて見ぐ
立あみをよろ〳〵つぐ〳〵内はどにあるさ内多をやはさせ
きんもさんぐにあの通ふ通が居ふもてたり〳〵給ぐ
内父山の帝に内財面あ見ゆ紀より奉〳〵させ給へば東
ちのびてわ〳〵せかの今の限りにや待んみ居よあさせ

給へと仰えをの源が源ちうと紀をう〳〵てかく思へよろみ
ちそ〳〵さを形そ〳〵思ひて形々〳〵ひをもあくりて形
かみと我娘のあやまち我がちせありで源を形ふ思へ
つておりまにふ誘〳〵後の人あけく居ふ我かよよの
誘〳〵といかの形ゆもよろと思て〳〵ば居のでくに
せん〳〵止めて〳〵むかく故あり悩〳〵形ぐし
て後ち出て内〳〵をかげ居よ故〳〵給へう。つる体
みて変ふ居かの内ぐ形通ぐ〳〵ちろ〳〵通ぬ中
形通ぐ見給かみと帝の内〳〵せかへ〳〵ちの紀の志〳〵せ
かで我内通形〳〵に消もく故ぐと源ち〳〵

がまをかれがうちうへをくべかやすとおもへば女三の宮のそうし
所のちよろうに殺方はかうにかのぞきをかいまみて
のさうしにおもちして日にようり給へ帝も殺さぬ條は
権大納言かのさせをふいにかけてこそ
親達はおもしろしと思ひ給へ文章博士任官ノ
をまつりてのこけの時分あすを引うに殺給まおこの世ふ思ひ
をもひて給べ音ぐ六条院みて所賀の試楽(しぐ)の時
源大ぐ所後ぐ所ぐ殺方はやと思ふ給る
をれ給ふついぞも行ぐぶよりにやに去れ給へ又一条の
後方かの方おちぬの高を会はようろこ給へども

あのこをひて今のこをひふうつせをへとて女宮を
のへし給へ所れ里ぞ所をどもおく所をへど所むすり
れねがのひをてをよう殺方をへ殺方をへ
こぬ人をうこ殺すれ行ようのかやむこすををとかへ
古宮の和れう所やをへ所歌をかをんかのあ
女三の殺をして世ふをへ殺ぐれををれどのへを
殺方のかさをぐにあうを里にて行をへ方の君のかうれ
かをひふををるを殺源わうう給ひて行かをさぐ餅
どもを給へ人をあを百ふ若君殺女三の所例(そぐ)をせ
をひて源

五十日

後ゝ世のゝ物語をまねびとゝどいで書ねの初たてゝ
とのゝゝが女こゝもせんめてしかくひまてゝ
五十日めとうゝゝいのゝ五十日のゝゝて
新まゝゝ柏木のかゝ方ゝ新葉の言を出給ひ一条の宮
わたり給へゝが市毋こゝやゝ東對面て。姫ち紫の宮のあげき
をゝつゝゝ子どもゝ。うゝゝ夕霧も柏木の新葉の巻をみのこ
給ひ子どもゝ。ねゝゝゝれゝあゝめ給ふ花をゝ時を
忘給ひ初ちよげふひゝゝゝを市給へて夕霧の大将
時ゝ行給ひゝぬゝゝぬゝゝ自ひゝゝゝゝえ結ゝ宮の撫を
とゝゝゝ給へゝゝゝゝゝ東

ゝゝゝの柳の芽ゝゝ玉ゝゝゝく咲ちる花の枝ゝとゝねゝ
ゝゝゝゝ見ゝゝすぐに柏木の父大臣の市ゝとゝ来りゝ
市髭もゝゝげ見て歌ゝゝにやつ見ゝゝ一条宮へ訪ひ
源氏給ひて市息東方ゝゝを出ゝ給ゝゝゝ
源ゝゝ見ゝて枝付の大臣
本ゝゝの宴にぬ見て出ゝ市ゝゝ霞の長ゝゝ東
ゝゝゝゝゝ給へ見

よこ笛

柏木権大納言のゝ世給ひ悲ゝゝゝゝゝゝ人ゝ

源さわ〜の山のはより雨かき曇はべり行月ふかく出て、
一周忌のもさ過ぐ〜に、寺里、さま方内ふあて、
ちがひ百度香奠の方あ、我法大臣、何うの方へ、我遊
四こゆり收ひ文、山の帝ハ、女三の宮ハ、城殿へ、後ち、
はつ紅さくもに結てこも尋ぬ女院の寺のかく
つ〜ち林よ、生ひ出ぬ紅葉、所ふ山そほ〜草蔭よ
源氏源て送〜せ給ひて、朱雀院
世をはれ入給ふ方ハ同じ心と云ふ
源かへ〜女三の宮
うき世ふの何ぬ心ろ山ゆ〜て宵く山路よ思ひこそ
若君送りて、代筆をとり〜し、こひ歌ひ、源ハ
ひとりの〜、この若君ハ、ものもわ
やうに思て、源
うき世をも思ひ出ぬ、昔のこと、物ハ、
夕霧ハ、柏木の小の方、一条の御葉の宮と、ふ所ひ、
秋の夕のそれ何ふ、夕霧一条の宮へ、
方れば御葉の宮毎こ、やはり対面、ひて、むかし
宮物語ども、ふ、ものこと、侍ふ和琴のまけ、柏木の
ふ弾ひ、物と、あつ〜、ひ、ひ、御葉の
宮をもすゝめ、人ハ、箏のこと、ふ、

ろしたるに心ひかれて、秋の夜ゆゑ一結んをかうぶりそ
ゑ雪降りかゝるやうに思ふ。笛をとり出してかきなでゝ
ゆくへをふしぎがる。蓮生の中に格子をおしあけ結まで
とて、ふきうにをり給へば、少し吹かしそふなる所
寄こげなる葉の名の古人の秋ふかくなぬ出つこゝろぶ
清こゝろ

横笛のもとへ、ひらふぬと、くれしきそつき
ぬ。やど宿三年ゆゑ、格子をたてゝ、こふ所をつ、
一条の家へ、さり再ゝ行かとて、唯ゆゑあしじ
下ゆかりてのたまへしとふの方、格子をあけ、ゆゑ
ゆゑ、ふかぬ、ものうもなるに、格子をづゝ、ゆる月
ゆゑ、ふく、まゝ、ゆゑ、ふ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ

ぞとさぶらへば月あでみてまゐりたるに格子
明けたりゆへ物のけづいたてまつりけるとおもふ人ば
清水に参籠の子持親ふ敬ふ人ば見ひやり姫うさきものを
きふかう人てまつりたりやうにて明けどふ立ちてそのく
けいえいこうとれのつぶさにけうがおもいてびあつげみてるを
みるに古唐門賢ふ米のよ長さ言ふたうよとあり
しふ行ふ敬ふにやとおぼつかなく六条院へ参りあへば
侍従殿相逢の女房の高子ちいづかまむ迷あそびあ
女三の宮北殿のかはらもとりあつをみるつくづと
見あへば御未ふ御ふうやうに好ましげ人をれど会の内ふ雅楽
ふもあるまじ心ひとりひやうと見あひて御未の親達ふ
侍りしたるほかに新見よせんものをと明れあげさかる
ちりまへと見せまゐりやとおもいでさふ子にとはるべき
糸邪推ゆへ明くる敬べしと思ひ過ぎ源ふ一条宮ふて
落葉の宮琴第琴さひてまゐりて笛のふも
内ひ出て宮ふ見えまゐさ海の琴を笛を
ふ侍へよといふふとおぼさせおまへどさもいとれ
給ふ人ば云給ひて宮あへ人ば

又蓮の花のさうまたに女三の宮は持佛堂の供養
せさせ給ふ源氏の御ぶんにてはまく髮おろし
給へり入道女三は宮の朝夕讀誦し給ふ御經さへ源氏
自らもせ給へり導師まゐりて御ものがたりなどし給ふ法を
説給へり御くだものよ物ひとりとなりてなみ
ぬやまちも羅なるさまにて紅梅にて源今しもさかり
なる秋の花ものまつを賞ぜ給ふ御ぜんにて
出を敬ふ世なれば歸ぞうもたゞ西の十五夜の
月も源氏にて御ぶんにて松虫鈴むし等のよ御ものを
宮なれば松虫の人の御ぬ不ゆてへたるのかぎりなき
孔雀にて人もげき不ゆてはさもはげしく
給ひ御ものなどは何もなくくりてもこゝをゆずにあるて
御くるまに出給へりとのみあれば入道女三は宮
大きに秋をだうしとなりにしをうの給へる記給ひのこゝ
御門人一六条院
たゞうて筆のやどりをいとゞも牡丹の色ぞうせぬ
とおもふ人おもふかぎりなく御門の方の三部卿の宮夕霧の大將
そのの敬上人などまゐり給へば源氏のうへ出給ひて御琴
ぞ琴とりのぐにかきあつめ給ひしの御のえんにてあり御門と
の給ひて御門のまゐりけにてひぞうめくるゆ冷泉院より

序位あり序製

雲井にかけて澄まる栖みも物わびれせぬ秋の夜月

序文一六条院

月新の月一雲ゐあるこゝ我やどのうち秋ぞかつ澄る

つく鶯のうさもせかれもつけ行とて序のうゝび止めて

長部御内裏、爪ざる、雲井の人〻集つまて、深泉露へ

集り来べく院に結つけ收りせるひて、四方庭のも和国のも

さ御〻に移ちろく新んはりけるあけがたふ人〻

御り移の源氏秋始む中高あふ序舞面はりて四方詠りも

出移ひて四〻りの人〻

實

文さうる

ぞつ新ろ人とくふいされ文さうれ文さうれ文さうれ物末のかの方

一条の岩葉の高殿ふうけて人めふ物末の遺言を

立ぶ〻ぶと清ふ御みて、ひれ物めかくてもやむまで、

月日ふつ〻思ひまり移べ、よろぶ、金法ふ物ふ高殿の

高れ序ふ序息家物のけふ法ひ移ふ法歳の蘇

小殿とふ家ふ家を持ふひられべ、それ〻おりて山ふ新り

たる律師を清ぶひ、彩せ弟むひあ也序車より始め、

序位の出ふもまで、文章ふ人〻、ふ出ふ四方ひふ

小盤くわうりをふ八月中の十日作りあまだ富山のうえに
おきそしろし松ゐ侍の小山のえだにさくらあかねば
秋のうちをづくして紅ふ系おとこどもおりたる御所おうも
あくまもあもとうてみやびてみやびあへりあへば
ものおもしさ小菜塩をはてふをうしはまりあて西おもを
てふ蔵をの高をと玉をまり こやしあい系うおをして
修法の壇ぬぬせ彩ふをせさ弱ふせどさ而ふて宮の
居ふつさ弁愛なけまだ蔵菜のおりまし浄蘭の
まへふをうりを入まりて行めと思修ちぶへまり
海に彩の陰まで雲あちらあて めつてん方をはえねば

山里のあの道をそるをふ雲ふ玉もむそもあさ色ちて
夕雲の方様とん氏雲よりまの吳名ふの思西蔵菜の雲
山綾の羅をとりあて立雲をもをるるへまそうめし
夕雲おとめくて市蘭内内ふおさり入見ひわう彩ふの
内を侍の玉をしあへど蔵菜の高の見らばふ海まをと見して
小の方打陰子をはて隠むとをあるをふくはようびて引をぐめ
をりあへと内方おとくめくれあひて小神の裾ぐろ結おりめく
見ろぐ般内ふぐ玉彩理りを見しはありめりあへば和しして
ひをしをしにもをりてあしへびようもすぐしはをはて

出家ふ所息耒の如ちかしこ
大日如来宮ちとの志あらば何の業を出さんふ所ので験
形こんあどや修ふ法ひて所ふ性文秀持大日の門ようかく
志法ふ出家ふ山やとそひあへば所息耒故高門智の遺言
にて我れをたづねとて知ふ入法ひあへあまるふ所ふ我
所へもかうあへばふとそふ耒ふくさ法ふるとかうあへば律師
何事と陪くさつぐ所ひあて入法らば所けさ見へ
来の法ふ物ち我の高の形ひまた西の法まへより
ふとそ我も記男の出あへる我秀深くて何ぐ法ふも
又分法ぐるもと考子の法師ぐるも文秀の大日敬と

古を中て法ようつ遂業の葉の高持所ふたあへそと古を高
もふく法のあふ所息耒ちこと実敬所ふ出耒法耒法ふて
所けたるぐ人すふあてるあへば法我中形ふ
法ぐと繋ふ法師立ぬる法ふ将の君とふ世房を保
ちのくふ法ちとめと見ねあへが有ようどもかくる形ふけ
あらぬ内秘の事ふ人ふ法ちぐまで大日敬と海の
法ふとあて云ちふ法ふ法ひ所ふ法ふ所を立こへ所ふ法
あへば迷ふ立ぐふ法ふ所ふ中ふ所ふ法ぐ持ふこう
古て敬ふ所めと所ひつけあひて古ようひも文秀の海のあふ
めと法持ふつどふちひふけ法ひふづふちふこと

思ひ出ることもひて、いづこ方をもあくがれ出て、ぼつ
なけまでだにやはかよりなく雪ふみ分けうつるあ
女郎花をとる時、ぼつ紙いづこにて一枝ばかりの名をとめん
みやこ氏なんとなんなりけるつゆ書なんべ、名残跡の
やうにてつゆとなりもよりあまねく、好きよせて月なみをふかう
ぶんとりなつぶ行なみをもとのみなびこうしぜんにも
あのやうにをもとねばかれどもとに俺なんどふの方庵し
なりでもあるもはぬ思ふ恩ふ、縁しにはかぶ、夕雪の
方より波りなつぶるふ、さるそしにもをく見よりはあの
こうしもとあらぬいとうとてつるにはかぶの孤なりすこし

人ぶ海しもと人も男二人月なるなり。まして皇女も獨り
住みてくるしき時なりこそ俗法なる事、指末ふ敢けなきを人
よりもなるまじ思ふぶるもしかど、それはかるるなりてのなるれば
くるなりぶ。今氏女雪ふこうの事なるなるにあるべ
若しにるなる事なるぶ。ふぶ深くりてあ、かしぶさもなるべ
同じ立名も、和歌よりもしんよあぶ一枝の後ぶるもにるさべ
氏作みて捨なんよりなるべし、人のうにに名をとて、家
ふふ入ねばかく捨なん、俗ふあふ仏是家作るる。ゆる
まひと腹立しぶはつぶけなるなりおふ物もとの外悪く物の
けもれをえて、引ひるるほどふ、俗ふ清へて、立ぶ初えふ。

知えゐ、律師隆さて、形みと云へどかひ、蔭葉の蔭、
埃まで、を添へて、歌をみかと、くゝ理りをもて、云ふ云ふ
云ふ、六条院より、山の帝より、山の
山息不の甥の大和寺茅の、を稱ひ、ふ、とをげし、
云ふ夕雪を、ひて、ふみて、云ふ、ふの、人、蔭葉、こやを、
氏人、山息不の、ふ、ち、重り、ぬく、成みと、云せば、恨し
て、返辞んで、云ふ、ば、公、の、ふ、ば、ふ、人と
同、恨みて、ふ、ば、ふ、ば、ふ、人、ふ、雪の、息不の、遠云ふ
氏、の、云ふ、山、見、氏、形、云ふ、ふ、て、云ふ、人
ふ、ふ、ふ、と、人、ふ月十日、俗の、雪、小、人、ひ、ふ

ふ、山風、ふ、云ふ、堪ぬ、ふ、の、梢、底の、葛、を、ひ、ふ、ぐ、し、争ひ
ち、見、鹿、ふ、ぐ、離、ふ、ふ、ふ、み、山田、ふ、ふ、ふ、ず、
色濃き稲の中に交りて、うちなびくもうれく息迷例のみ稚
の君石ふて、義家の山、稚俳ども、ふ、かの、山息不、ふ、れ、ふ
ふ、ふ、ふ、ひ、出て、ふ、ふ、の、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、雪、の、ふ、ふ、ふ、
年月、ふ、る、山、ふ、る、ま、ひ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、と、歌、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
山、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
人、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、

難面（つれなく）人の心も分らぬど。つぶやきながら涙を流すを紫の君見て。
今までの此道にさと来しくてめやすく思ひしにかくちかくこ
生ぐさき物を引出すは。是ほどの分別のなきさみに似る
まじきが。看経数珠にてこそ阿しめ。ちとも口へべからず
にもあらばとかげにて。歎きながら。女房は御息所の御為にて
ぬれば。先（まづ）この一条の家へわたしまゐらんと。一条を掃除（さうぢ）など
せさせ給ひて用意をさせなば。落葉は御ぐしおろして小野に住
まさんと思せど御心にも任せねば。御車よせて人々すゝめ
まれば。泣（なく）泣（なく）乗せなまゐらす御息所の亡（なき）骸（おれ）御経の箱を。
御車に入なれば。待（まつ）にある紙御経して落葉

寂しさの慰（なぐさ）めがてきかみにて涙ぐみける玉の紫の
一条にわたりしつきなれど。住ならし古郷とも捨がたき道に
御息所と続きの御ため（まう）に御帰しはどを見し出る事もなし。
納戸（なんど）を御座所に拵（こしら）へて引籠りれし。女房の小枕なる。
一条へ落葉を続（うつ）けなりけるを紫の君ひて。今まで向ふにこそ
あしめ。実（じつ）なる人の心の変（うつ）る妨なき梅とまけば。今よりのは。
何ぶらく成らんと恨（うらみ）つくまきまる程のなし。女房も。
落葉のおのこ家は納戸に推（おし）へ。世のうる紀時を淵（ふち）に身を
投（なぐ）る事あし何の物のまさしと淵にならずして。捨ける
身と思しかまれと恨みなくどかひなし。我の事は思ひ給まり

昔

雲井鳫也

殺ひて、清文大臣の内方へ渡りたまひ、君のやうにもの
ゐねば、夕霧聞きたまふ。大臣も御とゐ、のどめたる所なく
御涙ぐみ、ものもえとのたまはで、夕霧の大臣へ、わづらはしき
さまのみ、ど御ありさま、雅さ公遠の母君とこひ聞こえたまを
すこし、よろづ御心ばえ、御涙ぐみ、ものもえとのたまはで
らむと、ねんごろ言ひ慰めたまふ。父の大臣も、夕霧の公を
ものしたまへるやうに、御内方、御ぶ、けしきもなん
なほ、内方のおぼしをば、世のけしきもなん
ちぐの大臣
ちぐり、何ばかりの人をば、あまたあるとおぼしらるべく
夕霧の大臣の、さて、世と俗しう思ひ聞こえたまへ

ばかり、夕霧の家

何ばかりの世ふ数ならぬ身ぞ、何をあるまじと思ひつゝ、
世ばかりとぐ、夕霧の内方、あまりの思ひ、なきうのまあるにも、
伯父
ちぐり、ばかり、男也、惟光ら娘の、後内侍、年比、夕霧の妻あるを、
心の方、ものよりぶ、思ひ、又、氏、夕霧、出さ、殺ぶ、いとふ
思ひたり、家もよりに、心ちのせでと、後内侍
数ならぬ身ぞ、思ひ、まし、世のうきを、人のるみもめ、神代
清くし、心の方
人のうきを、何ばかれと、みるぞ、身に、かんとの、思ひざりしを

御のり

紫の上は若菜の下の巻にいへる煩ひより後、病がちになり年比弱(よは)りたまへば、源の君いたくなげき給ふ。御願にて千部の法華経を書かせたまへるを、二条院にて供養せさせ給ふ。布施(ふせ)にたまへる法服をはじめ、物の縫めなどまでよしをつくしたまふ。明石の御方、花ちる里も、聴聞(ちやうもん)に渡りたまへりける。ちかき別になりなんとおぼしける明石の御方へ紫の上

惜しからぬ此身ながらもかぎりとて薪(たきぎ)尽き(つき)なんことぞ悲しき

御かへし

薪こる思ひはけふをはじめにて此世に願ふ法(のり)ぞはるけき

花ちる里へむらさきの上

絶(たえ)ぬべき御法ながらぞたのまるゝ世々にとむすぶ中の契りを

御かへし 花ちる里

結びおく契りはたえじおほかたの残りすくなき御法なりとも

夏になりては暑さにも消入ぬべき折々多く、若しげなりなれど、そことなくおこたることもなけれど、ひたすら弱(よは)りたまへば、さらぬ人だにおしみかなしみ、あはれにおもひきこえし。惜しう思ひきこゆる御有様と見えまゐらせし。いくの、おぼしめしける。御娘の女御(明石中宮也)今は中宮なりしが、御対面の為(ため)に此院へ出させ給ふ。紫の上は御命の内にと思ひ入りて、なげけどもはかなき事の事

とておのづからにもあはれなれば。なべての世の常なるを
おとづるゝものゝなきにつけても。思ひあはせらるゝことのみ多かる
なれば。中宮も此院に座まして。宮達の中に姫君と三の宮とをわきて。
育(そだて)給へば。此二人を見給ふにつけても死なんのちぞ思しやらるゝ。三の
宮を御前へ召(おき)まゐらせて。おとなになり給はゞ此院に住給ひて
まして対のまへなる梅と桜を花の折々には心とゞめて
もてはやし給へ。さるべき折には佛にも奉り給へとのたまふ。此三の
宮を匂(にほふ)兵部卿と申すは此宮の事也。後に二条院に住
給ひし也。秋に成て世の中涼しく成ぬれば。御心地もいさゝか
よろしきやうなれど。猶ともすれば乱れがちなるに。中宮内へ参り給ふべき

なりとて。御暇(いとま)ごひに紫の上の御方へ渡給へば。殊の外やせ
おとろへ給へど。かくてもいとゞなまめかしく。前栽(せんざい)見給ふとて脇息(けうそく)に
寄居給へるを。源氏渡給ひて。此ほどはみごゝちもよろしく
みゆ。起(おき)て居給ふと嬉しげに思ひ給ふにも。御けしきを見給ふも
あはれなりければ。紫の上

おくとみるほどぞはかなきともすれば風にみだるゝ萩の上露

返し給へば源

やゝもせば消えをあらそふ露の世におくれ先(さき)だつ程経(へ)ずもがな

と思ひつゞけ給ふにも。御涙などもおさへがたきにみゆるにも。かくて
千年を過(すぐ)すわざもがなと思へど。叶はぬ事なればすべきやう

なり。今の世せんみだうの御堂とて、ことさらに作るとは、九帳
引奉せて、ゆゑある法の師の、ものしげくこゝにあへば、
中宮は、ものをさらにて、物の怪、海人ふ潮汐、霧の如くして、限りに
見えあへば、修法の僧侶、立騒ぎ、物のけの見所と騒ぎあへり。
海づらは、ものすさまじくて、かひなくて、ひるまるほどふきこえ
たる。修ひぬ程、ものまゝにて、立ちぬ、ひるまもおぼされず。
強もくれまどひあへり。源の中将、御祈くとて、所あひて、
夕暮ふのあひあらせ、僧百人入て、ひぐらし、ものさせ、修ふ夕暮
むし、聖方の奉ふ、見給へ、中宮面影わとれがるとて、侍ふ者
かゝりたるも、今こそ見えんと思ひて、女房の泣のゝしるを、たゞあ

新ふきたてゝ、九帳の帷子を引はげて、見あへば、物の怪
うつくしうなりぬべくなりぬ。給へる人、生霊
よりまさるべくなりぬ。侍葵遣の御使の女房、泣
まどひて、車より降ぬべきさまにて、つかひける。源も、涙ぐ
ませて出させ給ふ。菖蒲葵の上、物の怪、わたりの時をわぶし
物ふ、時々、物を言へば、みやの御方の御ものゝ数の
しに、ものゝ人まどひ、八月十四日ふ、死せ給ひて、
葬送の十五日の時雨、源、今の御ふかるほどゝもなけ
まで、世後、青さまのうんふさまの、ものゝもあれど、あげまふ思ひ
ほまして、遂世せ給ふ。後のそのまを思ひ出せば、この

なげくばかりとおぼしめして、念じ給ふぞ強くはまるべきを、
みな、あまをはいとまなくふちもとりて、かの神をあく出給ふべき海を
よろづの人をあつめ給へるとかや。あるいは、あまたの人、面白き人、見給ふ
べし。海にて理りぞかしと思ひ、源の身はあるべきとおぼしけれ
ども、なほ、歌ゆゑにうちを始めて、くりうすべき道あひ、ゆゑかも
し紀ノ国をも捨ぬ身なり。さるべき世のほどを思ひたりあやうに、
仏のすゝめ給へる身とて、とゝびと鳥ふくゝして、ひくにもれ、
あべひなす紀ノ国にしたがふべきうるかぬ。かくおもへん時、彼をも
にて、仏の道をもおこなはんやうにて、式公ゝ彼のあるあるとを
仏を念じ給へ。彼仏の大悲願の上のかくまあひをも成仏

彼国に首尾出して彼仏の大悲
古人の彼をもとめ給ふ。神をもとめ給ふ
市ノ人、六条院
義をもとめ給ふ。神をもとめ給ふ。彼の世をつくれ
中ノ人などをもとめ給ふ。乃ち、ゆゑ給へ

まほろ

源の紫のうへの御ひめ、明る年は、まの空を見給ふ
つけてもいとまなくひくにのこゝろをつくし
さの浜べくをあるぬ。浦の人の例年のやうに

年の立へど、御なやみ悩ましきとて、清對面もなし、清半の
兵部卿の宮わたりのありへば涙
かの霜の花りてもやはら人もなし何ゆゑ君のおぼすさらん
清之し兵部卿の家
香残とあて来つるかひなくたゞその色のくまりといひや おはしつき
御禄ひもなく織ふ裏の表のかく多り、清くらくらくえ
かの後なれば、哀なうすし清聖ふ成なりつけても紫の花
枯もし涌りける世ふ好色なくて清まくれ人ふ哀をつくし
紫のよふ桐をも思ふと世を来りし中にも女三乃宮れわたし
なれ侍ど、兵部ふ人ちかく出ふ出しなもぞ里みなど、

事に寄(?)て何かさ彼のわざやと思ひなへきしけれの、
あり遠(?)ひし中にも女三の宮れこつめの夜雪降し曉、女三の
家より御の立帰みて、齋宮(?)を迎へ入やうに見え、宮れ
介ればそげしめりしに、涙ぬらしなたり袖を引隠し、何も
なすれ給ふありらひなれり、よくれなど残終夜思ひ出るに、
暮(?)にても又人の色の(?)世の中の又も見るべきと思ひつづけ
なし。曙ふ枯きて部屋へ行女どもれ、騒しう積りける雪
ゆゑとふ長(?)をさくつけなへる、唯兵部の色紙する(?)に御心女
なられさりしき(?)ハ、いよりこなく出し涙
うき世ふハ中き清かんと思ひつ思ひの外ふ程ぞへぬる

清水の紛れに御手をとめて行ゑをせさせ給ふに清げなる
かれ家隆に見対面し給ふにかし。人に向けんほどもて思ひ
たづむべけれど、此月比におもひかけ給へれば、ひがごと有りてまの
世の人にもうたがはれんをうしろめたくかなしく、思ひ侘びて
人にも逢ざりしといはれんも同じ事ながら、なんかくし
手紙思ひやると目にみえるとハ、ゆんぬるこハ海さるゝその也とおぼすが
せば、女房に言ひて御簾を隔て対面し給ふ。御孫の三の宮を御后
みし給ふ二月になりぬれば、花の木どもも数多に時をわすれず白ひ
みちたるに、三の宮、まろが桜を咲かになりてひさしく散らぬ
やうに、木の陰もうしに几帳をたてて帷子を打かけたるが風に

吹よせどもみゆるが、かの君さればこそまされ給ひておほせ
ぞ見の袖をもとめけん人よりもかしこく思ひよりしとのたまふ
此歌は古今に式部卿におもひかけし袖の香ぞさく花を
風にちらさじといふ歌の心也。袖をもとめより木の本を見立つれ
几帳をたてんとのたまふ。三の宮がかしこきと也。それとはなしく聞まで
女三の宮へわたり給ふ宮は持仏堂の御方へ入おはして、行の深さ
御ゆるしにもかゝはらざるし御方ならねどかく離れなくおもひて
此世をこそ逃がたかめれどもしやまし御後んば、まことに心の世し
人もなきに紫の上の手栽の山吹、咲きしより心もとなく白ひかさう
なることを、いつまでと見る人べき女三の宮の、答へさせと

きこえんかのみちつけてもむらさきのうへのやうにおもはるるもそなたにて
よく見えんかひにとせんにうらぶれ出るかたちかの光源氏
なるかのまきをよそにおもひてうくちうるはしもなりとかの中
将をみて女三のみやより后ふかうしに世ふかうみやうぬゆへ
ホトトギスなくもあるとあ浅間昇下のあへど源の今然なかへ
あてるのやうにみるだ源氏耳ふあうて紫のうへをもく
おもうまとなりてこそうたのうたをかわうあひて
侍うぐ浅ふかるもかへあぐまーあをと言ってさかを
てぐ海をうて紅ぐさめぐし中将の君とかふ女房ふ紫れと
おさるかをよりそぐてあひて紅ふみびんかもたれば侍うて

こかをもあぐーへかべくて氏人ひとうをぐ紅くにらんぐけふ
五月雨ふかとぐ紅ぐめかのようかのるれ十日後うの月さ
おたるこうるの孫ーしれふ夕雲れかて侍物語うれこえ
かふ氏一えぐうもあ近付侍る氏法ふかうやうに思石ふどる
孫てぐ紫のようの心ぐーを氏ふ極楽のほんぐあうをとうそ供養
せあとれかるはつけてもあ悲しーさのものびがくあかへぐ過ふ
方れるかさのこかをえかつねふまたるまつる時鳥ふかれかふ
なるけぐ源

紅をへをものづる青の村雨ふぬまてやこうる山ほとぐれを
墨をあれも孫ーをかこかて池の蓮ふ盛なれをを氏後ぐ

はかなくとゐなかに、ひぐらしのこゑばかりや、よるになでしこの
夕ばえ残ひとりみんなつげにぞかひなかりける　涼
つれづれとわがまくらに残夜の月をかぞへすゞしき虫のこゑかな
七月七日にも御揃ひもなく星合見る人もなし　涼
七夕のけふ瀬の雲はよそにこそ別れ道の庭につゆぞこぼるゝ
八月十四日の法一めぐりおほせばかり曼荼羅を供養ありて中将の
君の扇子に
君こそは後のよまでも共に秋をまてば法のちぎりとなるらむ
と書かせしを御覧じて　涼
人忘るゝ扇も末に成ぬれど君こそ残る後のけま

九月九日に綿おほひの菊を御覧じて
諸ともに菊の花の朝露もえるより袂にかゝる秋のなみ
とおもふこそこゝろの禁中には綿をおほふに涼　九日には菊の
おほふ也　十月には宮この空も時雨がちなるにいとゞなみだのふる
雲ゐをわたる雁の翅もうらやましく侍りしおりふして
大空をゆくまゝ雁も時ありて見るに今まで[illegible]きちなきよ
世をそむきたる身ほど近く都に似月ならまほしき御続に
移りてくまなくぞと思ひおるに夏古などぞその序に御贈らじ
つけて引出せ給ふ彼須磨の明わりの時宗の上よりし来て
まそ文どもおかしきおりふしに唯今書たる御墨付など

がふかうせのめつにけもとつぐさねをこぶなんよと思せど
かひなくて、おまへみて嘆せまふ、たゝこの中みてさ（ふさ）人の
書し文あど見えあり、なほ海てかさゝしそれをも
見わるぬまで、姫うは水川ゐる激の、水茎ふかれそふを、けまり
ふよりをくの見るべきをもかゝりてこれがよりも見たま
ぬ引きれて、源
たぞの山ちをみ人をもとりて海を見ゐるを狩まで
みちまりたかさみけ、かゝりに
かさ川あて見んるも悲しさ濃姫等同一をるふ姫もあり
と書つけて、ふる嫉ゐをあふ、仏名をもとゝ一づゐにそを

思せば、岩よりもあり見ふ出法ぐ、導師ふ出屋あるゐるとて源
相見ると過ゐる月日をもとゝぬ百ふ年をわがゐるもみふや春ぬる
禁中がさみふ仏名とて、師走ふ法事ゐる也、元日のゐ者ゐゐ
ちとゐるぐゝと接てさせゐるひゝくゝたゐる初さで始げまく
おぼゝ海ゐけたりとぞ、源氏のゐ月ふ氏時源の出年
五十二三也、氏巻と、白ふ京の巻の間ふ八九年ほど也、氏間ゐ
うせさせゐふゝ、朱雀院、殿仕大臣、舞墓大政大臣、葵ゐ
兵部卿、氏宮の上ゐ、市父式部卿の宮など也、

ふ方ふ京

源の光かく過なりし嫉妬らば立つべきなべき人〻末〻の
御一門の中にあり。されども御孫の三めなり。女三の宮の御腹に
出きたりし源の御子なりける。二ツにかはりとなべて所〻ねど。
源に限なりば。唯世に見ずひ給ふらん。くしき也。心え根の
てん三の宮と兵部卿の宮とはさらの御家は紫のゆかりの
御甥なる源の世に二条院に於て御元服の上の御為にも御孫
分也。又雲。今の右大臣也。六条院へ一条に不足せし落葉の宮を
移しなし。源の御かくれは落ちる里の始め給ふなりし二条院の
東へ渡りなし。明石の御孫の宮もうれ御後見して今とのごとく。
六条院を住なし。薫のかの。源次泉院へ中宮なる人が院在でて

思はしかづきえ根せさ労待候ふなりし。その秋右近中将になりせ
給ふ。稚き時源の御子にてなり所なく此子綫など折給ふ
所ろらけにやと我身にあやまちのあるやうにおぼかしくて。独
と言ふなる
折が川といふ所にましなりて始もそてもさねね宗身ぞ
御母女三もかくさべかりの此所御年をやはして於り給ふの折ばつの
所さるなりとも仏道に入てあるましめんと思せば心え根を
うかさまじもなくども心の深さにもなりねば一回しとくもいなくの
御かくちのげに過なりけるほどのあはれ大かたにいかにくもう
聊のしげみ心のおく姫の見えなく。おく御身の如くなりやあや

しきまでにほひ。あそびなど折ふしも此匂ひにかくれなかりけれバ。
これかうばしさが是なるに。兵部卿の宮ハこれをうらやまし
がりたまひて。さま〴〵の香集め身にしめ給へバ。名まではかど
匂ひ也。是によりて世の人の異名に。かほる中将。匂兵部卿の
宮と申して名だかくおはしけるとかや

紅梅

其比按察大納言ときこゆるハ。柏木のおとゞ次の弟。右衛門督といひし
人也。本妻のかくれ給ひて後ハ。髭黒の御娘槙柱の君とかたらひ給。
源の御弟螢兵部卿の宮の北の方なりしが。御むすめあひそひてまた

後家
ゆかりけ給ひしが。おはけなくなりたまひて。姫君を引具しこの按察
大納言の北の方になりたまふ。大納言の御娘先のよしに二人あり。
御腹にハ若君一人出き給ひ。姉君をバ春宮の女御にまいらせ
今ひとりの中の君ハ兵部卿の宮にと思ひ給ひ。春宮の御弟匂の宮にと。
大納言おもひて。折しりがほにさけるを見て。若君に姫君の
御庭の紅梅盛りなるを折て。いろ香もたしかにしらせ。枝を折て若君に
兵部卿の宮へ大納言云

心ありて風のにほはす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき

宮ハこの花を香ももてはやしてかぎりなくめでたまひ。御かへし

花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりをすぐさましやハ

ゆく末かたらひつゝ、とゝ、涙ぐましくなりまさるに、大納言も心ぐるしき事あり

竹川

髭黒の太政大臣は、源の四姫君の玉蔓の内侍をゆかりとせ
ばや、と思ひ、その後は、男三人、女三人出きたれども、姫君達を、女房ゆ
へ、せんとかづきあひ、髭黒のもとへ、内侍を澤の目あ
三人の姫君、とりたてとうけ給はるまで、冷泉院
よりも、帝よりも、女房ゆへ、せよとの御そゝのかしも、もゝ、所毎
玉蔓、冷泉院へ、参りつゝ、髭黒のゆかりを

ゆゑ、おぼしたるに、式姫君を、冷泉院へ、まゐらせ、玉蔓の
母北方の大臣の三男、義人少将とて、式姫君を、かゝげ、
内侍に、侍て、あるべき、式義人の、少将の母方、分て、
姫君とて、同士地、姫君の、侍女、分、侍、とて、式事
そのゆへにとせあるべき、中将も、式玉てゝ、兄弟、
うとめ、ゆゑ、ゆゑ、姫君達の、子、なし、唯、あ、ゆゑ、男
あ、ど、ゆゑ、実、ある、君、ゆゑ、出て、侍、ゆゑ、強、ゆゑ、
四月に、侍、後の、君、ゆゑ、義人の、少将、筆、中将、おりて、琴
など、弾き、竹川、とうあひ、拍子、琴、ゆゑ、ごとく、
竹川、とゝ、僧馬、楽、とゝ、ひて、代、ひ、ひ、世、ひ、

川の水に流し、祿を捨て、ひとり川伊勢の海、かつらき城様へ参りて
数々あり。今は世のうきたひも、慕ひて行くふ行方のなく
竹川のそこ、出し一姫ふみつくさるの屋のそこ
所こそ、侍従の君
赤川ふよを姫ぞとんでもなく、ひとりを思ひ行海
氏姫君遠の新屋の庭のまへ本ながれ川に氏様ひの氏君遠
をそこあくさ時、そこ〳〵とて氏様をどひあひふ所父母玉菅
姫君の様と所こめふ、母玉菅、妹の君は花とのあひ
ふをとり、あて、花のそこふ氏様をかけ相にて、姫君こそ
其名をすみを、花人のみるのぞ見て、ひとぐ思ひあくが遠ふ氏

川こそ所母三条の上所父文麿、文分廷之の子孫まで、ひとりにて
して姫ふそこ〳〵と、玉菅人〳〵のみ、母君のおぐ人ふ
川こそまでさ所ふむけ、なるまかぐ、第止ぐ〳〵ぬ入給ぐ
玉菅と、文麿の小方とのそこ〳〵也。後ふ四月ありあり君ふ
冷泉院へ参りふ、帝ふ、のみ所せそこふ遠せ、ぬ四乳母
よこ〳〵ぬぐ、色〳〵に、参〳〵ぬ、妹の君小所母内侍を、
高位小ふ、ふて、姫君の冷泉院所ふ、ぬ、ぬ、ぬ、
時ふ、ふ、ぐ、社姫む中宮所ふ、ぬ、の弘徽殿姫ふ、ゆ、
ぬ、て所とぬ、ふ、氏姫君の四ふ、ふ、ふ君一不姫君一不
物ふ、ふ、ふ、年月ふ、て、ふ、ぬ、ふ、ぬ、ぬ、ぬ、玉菅を

ゝ[illegible]がりて、何に法皇院（ほうゐん）義人の小侍ゝかゝるを、
聞に[illegible]べうまし[illegible]その後、今を二人の人〻、宿位も[illegible]、公ぐ[illegible]も
同じけまで、世〻めぐりて、おさせんものをと願ひ給ひ

[illegible]

[illegible]世に[illegible]まつれ給ひぬ。[illegible]、見は桐壺の帝と
八の宮にて、源氏の侍者也。法皇院の実は源氏の侍子なれど、
うゝべの侍（兄弟）[illegible]也。氏法皇院を春宮ゝ[illegible]せ給ふ時、
源氏の侍兄朱雀院の侍母（弘徽殿）、深く妬ゝ[illegible]ひて、同じ侍腹（まゝこ）
なれど、八の宮を表高ゝと思ひ給ふ[illegible]の義（ろけん）ぜ[illegible]ば、

源氏を姫氏、八の宮を侍ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
しめ、その御ゝ侍威勢（いせい）[illegible]、[illegible]（まゝ）の方、大臣の侍娘ゝ
あり給ふ。公ぐ[illegible]紀は任（まま）[illegible]ど、深き契（ちぎ）りの[illegible]を
浮世の慰（なぐさ）みにて、[illegible]なく、[illegible]のあかゝして、過（すぐ）[illegible]、[illegible]（うらく）[illegible]紀
姫君生まれ給ひ、[illegible]を限（ぎ）りの形（なり）、[illegible]をとゝ[illegible]づきあり給ひ、
[illegible]せあるべて、又姫君生まれ給ふ。[illegible]（うち）の[illegible]（ち）[illegible]ど、[illegible]を
[illegible]（うち）[illegible]ひて、ふの方いらせ給ひ、[illegible]ひ給ふ[illegible]世を[illegible]ど、ふの方に
慰めてゝて、今ゝを[illegible]つ、今の世を[illegible]（そびか）[illegible]と思せど、姫君達を
[illegible]け、[illegible]ゝ方あけ給べ、侍仏方[illegible]て、[illegible]持仏の
[illegible]（ぬんじゅ）の初まりに、姫君

遠を教ひ成人して後琴びわを教へ琴のうらうれる
日新月異池の水鳥ごとものびび離ねをうらやましうれがめられて
琴琵琶琴をしへ小さい花びらをうるにがさなりし給ふが
あつまりに面白く学ぶ道に後をうけられて八月家
中の君
ちはやつびさりにて水鳥の川ながれ世ふ三秋つまんん
ふづくしやと序目を行のごとせみふ婦表
ふでのくすぐちけそと思つるもう紀水のちぐうそそ出る
中の君
あくしそとひ行きしら君あくが我ぞすそりに成べこうまける
序まくしらんとをとげふて行りますをふであそれふ
巣守

思さぶらん序父帝序母女序ふ
ひ後見をあけまが本ぐ後ふ
わてるふづくひなどもんでもつせあつん
立合女房あるご女のやこに出りませば序母方の祖父大臣乃
序源氏金銀珠玉をしまりれど好物をなくせ
よそ〳〵ひ兵衛道具などづるまで海をたる物ふ氏住ふ家
やけふれが字治ふ山ぞと物ひふ福ひふ川の
わうの形まふ細代のけうひちうくはまりまして国うな新
ひ物ひふ物ひまけまどんんぐふもんん花紅葉水の流まにも
ふをやるおよりにて形ぐあるつ形のそれ〳〵ぐふるる形まる

浄住寺のまへに、ゆとりたづぬるに、ものまるくして、式部法師阿闍梨
住持まことに才学ありて賢くして、おのづからの学問をもつとめ、ねんごろ
なり。在京のあひだ、八月宮の法文を授学ひまゐらせ、学問をかぎりて
学ぶこと、ものしりなり。法華経を読誦せられ、仏会ごとの蓮の上の
はすの露をあつめ、池水をたたへぬ。式部君達をこん拾んうしろ
めたくさぶらひて、阿闍梨冷泉院にも
参りさぶらひて、在京あく満ぬ。式部阿闍梨、冷泉院にも
浄住寺にもとゝまる人、ものしられず。そつゐでぶ八の宮の仏法ぶ
ぶく、おのづから法華のかりていまゞめ、ちの学りあるべき俗
聖ぶどく八中侍る優婆安塞の宮とゝ、見世蓋中納言ぶ
さぶらひ、阿闍梨の物語をさぶらひ、そのとゝのうしろ下ぶ乃公の御まへ耳

とゝまりて必ずものまゐり、物学ひ侍るんあど、式阿闍梨を毎のゝ問通
ものぶ、阿闍梨八の宮ぶ蓋の浄目ぶうゝ見たまとのみ、ものぶ
法華経をぶ、考ぶ浄ぶ、など通ひ、そ後ぶ侍る海ぶ、ものぶ見ぶ、
よりもあるのまぶ、住居ぶ、いとかり和ある学の居ことそ、
如と海ぶ、ものぶ、学紀聖才ある法師ぶ世ぶ多ぶれど、
法華経ぶ、ものぶ、阿闍梨ぶ、ものぶ、ものぶ、
下ぶ、紀の浄弟子とゝ、ものぶ、ものぶ、ものぶ、
学海ぶ、ものぶ、ものぶ、式八の宮ぶ、ものぶ、耳近を
侍ぶ、ものぶ、ものぶ、ものぶ、学ぶ、紀浄
住居ぶ、ものぶ、ものぶ、ものぶ、三年ぶ、ものぶ、

明ぬ秋の末に八の宮は寺にて常不断の念仏を阿闍梨の
寺にて七日行ひ給ふとて。八の宮の御留守也。有明の月まだ夜ふかく
さし出るほどに出たちて。薫宇治へわけ入給ふ近く成るまゝに。
その物絶々に琵琶の音よりかすかに宮の琴の御こゑと箏
きこゆなど思して。おはしつきたまへば。留守居のさぶらひ出て
八の宮の御留守なる也。姫君達へ此よし申さんと云に。薫しばしまてとて御
弾ひをやめ給はん。先しのびて此弾ひをきかせよ。家の君達の
人のやうに好色の心のまじりたる事あらばのぞかせよと合図に
かくし給へば。折節竹の垣しこめたる所を立てゝ。此ぞ
こゝせなるに入まゐらせつ。月のおもしろきをながめて。簾まく

巻あげてゐたり。大君は柱に居隠れて琵琶を前におき。
撥を手まさぐりにしておはするに。雲がくれたる月の俄にいと
さし出たれば。扇ならで此撥にても月は招きつべかりけりとて
打のぞきたる顔いとらうたげにほのかなり。中の君は琴によりかゝり
顔さしのべて入日をかへすばちこそありけれ。月をまねくは違ひぬ
るものをとて打笑ひたまふ。是も少しやうにうつくし。大君
月を招くとはおよばぬとおぼすが。此撥は月にかよふ物ぞと
もろこしの事をも折とけ給ひかし。なき御かたちともあるまじかれば
なれば。撥を見ても月にかよふ物と覚えてかはるは琵琶の
撥を納めて遊ぶ所を隠月といふ也。かくいへるなるとや

人やあるらん。御簾おろして。柱ひとつやへだてなん御けはひをきこえて
かく年のかさなりに御物語をも捨置しをきこえなば。簾の
まへに御志をも孫君にて書集めたるなどもまうさんのねがふ所起しに
やまとなれど。大君あはれしらひなるに。老人記しをきてはべりしが。
それに御身にて大君のうたのなる式部いふ人。かく念比に語らはせ
なりし。八の宮も。姫君達も。将ひたる御事などはべりて侍し也なる
やうに侍りしど。何の事なる昔の物語がたりの侍るを思ひしりにおぼろし
めさせんと年比頼んじけるに嬉しきものに侍るとて物語。
柏木権大納言と申し人は。紅梅の巻の按察大納言の御兄也。
其めのとは。私の母なりし。この三河がしのその娘。名を弁とて侍る柏木

今八の宮の宮ひ給ひしわたり侍らんと思ひしまゝには。ゆゑ給て妻もなく
住ひ侍らんと思ひて。わびしつゝ業なかりけるやの
節なりまたうち侍るばかりけれど。御方の対面もたえて人をも近づけねば。
御孫なる君も宮腹なるべしとて。明かさに
京へ御のなりし。姫君へ業
椎姫の御文をくれてある脉さん梓の衣ふ袖がぬれまさる
涙かくし大将こと
侍らひし宇治の川波さの衣や袖をくらしあらん
八の宮阿闍梨と聞えて打ひなる念仏の日数のみてける程をかぞへて。
かならず文字治へおもむきなんとて対面を願ひて住ひなれぬの

度
あひ見て帰りくかの方に行て移り給ひし物の
言葉笑顔とかう出るとて悲しくて涙を流せ
八の琴の琴の琴の音を聞かせ給へ弾き給へ
取て弾かばいと高き所に行ひの時分に成れば物仏堂へ入せ給ふ
かの方に無花果の花咲のすると聞くと氏無き
姫君逝の所母かう対かしとあるとぬゆるとなるとぬ咲て
姫君の所後見ふして玉あるとあるとぬほど移り
柏木の言葉ひしかるとの薫の生れかひほどのよく
して移る柏木女三の宮と夜かの移り無きに又書て
見へと女三の宮れとて無ふ移けるとどうぐと後ろてこの屋ね

うちふ無ふ文領の女房ふ無て行てくるとて十年修ふ
離逝後家ふ取て都へ移るとあるとあるとある

又うはるの生まれの代書て

余りべそれともまでくれぬ者ねふ事　私の恋ひする

書さしたるやうにとめて、行後の君ふと上書にあり　紙虫

出のすゝかなめて、かびくさきあぐ、何といさゝえば、おぐ今のさ

ゑんにもれとゝねが、落ちるまでまつかべ、ゆうに取り海

ゆんと笑止ふ見ゆるさ

推うもゆう

白ふ高ふ源氏の内孫也うはるい実の根末のゆ彩まどうべる

源の内子ゆれば、白ふ高ふとい　伯父　姪　おぢをゆ也かうるの出母女三と白ふの

内父帝ハ内ふ　ゝ　ゝ　ゝ

前の吉野どの八の姫つもよく咲へ、それ八の姫よりもかほるく
清女あり
山ぶきの露吹とくさにあらねど八重咲にけるなをかなしき
うるはしかりて白ふかりて白ふ
をちこちの汀(みぎハ)の陽(へだ)の花吹かよへ常盤の川の影
かりるか八の姫へまうでゝ白ふかりて白ふ
自中納言ゆ一條へ面白き花の枝ふ付給ひて姫君へ
清女ゆ清うのさふ
山吹白ふあるうに見さて同じかごゝを取てげふかる

清うへ一ゆえみて取ゞれどかるゝ取りの仮初(うたゝね)を深(まこと)の
やうに云ふ人の頃(え)りてをうり花也おゞ何ふ人ゝ
ゆゝ中の君ゆてをる
かゞゝをる花のおよりに山吹(ゐど)の枝をとるあなたのたびと
白ふの巻もゝ人ゆ後大納言ゆどゝ来りあゝ公なゝゝ御ゆ移ふ
八の姫ふ来のつゆゝ山ゝをく取があふ姫君遊移びをのひ
みふまに山づゆと云ゝ見一けゆ出ゝ一かゝわにをゝえゝ
かりて花ゝまんをゝをゝ公ふあゝまゝものをとみえゝ
大君世ふ中の君世ふ成ふの八の姫ふ今年ふ初りくゝゝ
ふゝゝをく年也おゝ公ゝをく思て考より清行ひたゝ取く

せきぶんのうるのを秋中納言ふ成ゆ宮殿へわうを移へだ
八のゑ者をうたをふ收ひゆひ公ばそ紀内物ごたをどを竹え
みひて行うん行みを姫君月ん移ば宮をひゆ見はをうちろ
めて行どたのをゆへば公を如生ぜをうけのひゆゆを姫を
見て仏業よ入ゆをて八の宮

家行て宮殿者ハ何をぬも氏ことん月をでとでわりゆ

序ゆへ山ゆる中納言

山の行ん世ゆの指せん者をよのちだの行ごるをの者を
ゆるの姫君達のれの海をを方へ寄りゆひて毎紙をて物語し
ゆ指木のゆゆうて公紙はをへしよりむ川まを見て

会ひはをうをひゆ者のゆるを人の指はたへむをてるりて行
義ををへば山ゆで宮ふたのををげゆをだ姫君達も涙(うるを)へを
をて行へゆへば序簾だ指は對面ハ者ふせを指ゆふかゆるハ
指姫の巻ふ琵琶をと知をさ指ひゆひを取て弓ゆひ指を
道ふををめて山で見を家物ふせんとゆふれど雪(ひゆり)の者ふ
ふぎ一ゆををて海で年の一分が今氏道をゆのゆをん也
人の行ををへば山ゆけをだふをを出をでを(ゐを)秋深く
成ゆへば人の家ハ山ゆをうふ出をでを(ゐを)ゆ秋深く
ゆて行りんと思て姫君達ゆをろゆのをひをを(ゆを)紀(あを)へ
し紀ふ行をひをを紀者を行ゆ一親の新よゆ一ゆゆをを

かさんど紅のあひ染て河内国利倉の寺へわうまゐる姫君逢ぬ
ぬぎすて袈裟ばかりをかけ一心不乱に念仏唱へ給ひ七日行ひ
終る日に念仏今日わうり結願成ぬ法入来りて今新より脇を
指ふと告げ給ひ目覚ましもつぶさまして彩雲厚き小袖ども掛つて来る
あふ二三日にも成ぬ内に彼を乗り給ふふさのこれをもて
あひ性やうてよく彩り給へんなど頼よてのあひ知こん姫君逢の
内にとれば〜彩げくに曙の空ふ山より入さて氏東方明るに
内れ来りとヤせだ物もれ行えあらぬ方へ悲しきあり
こうはるを笑ひて有へ口ぶりを見て出る所ひ今所ふ笑え
あつは白雲うをあびく出彼つ内ひ所ふ恋よて。かはる

わうまゐ姫君逢八内ぬ〜彩逢だ。花の百ふやつ逢ておいん例の
無我百出て八の雲の隔なくそて彩すやうにと。その〜あへば
うとかへ〜ば給へん人待ふつ内ふ行ふをお逢あれば今ヨろふ。
人づて彩〜で給へんとのあつ内ふ事所の出ぶ〜をおろう彩〜ねば。
大君おし〜いざり出て。御簾ごしに對面し給ふ歌さに見ひはれ
あつらん内さ面。あう逢ふ彩〜ばら逢て。かろふ

袖のよる涙ぞとこそも墨染ふやれる神を見ひこそやれ

とひとりつぶやにのあつ内ふ。ひろ〜大こさみ

逢ふる神をだ嘉のやうにて家多で情に亜ふあれ

とて給へ〜ば歌さへあひぬ。年を巻うに書ひ〜れ落ちく

時代がくるまであるまじき事なれば、
はるかに思ひ絶えぬと思ひて、年は四十
ばかりなれども、なほ若き人の
にて、なほ新らしき人の
なれば、産婦などに引結ばせて、
ものつづけて物などいふ事、いとめやすく
なりぬ。公の用ふかくていえもつまで、中将君をば自分の
なり。姉君をば亦あるべきものと思ひ、妻の四方にてもるべき
べきふまじきなどいふやうにそらおぼえ、さやうにもあらず
なくかうばかりなれば、なほ
有付の事をなほ

身はこのあたりにてさるべき親のもとへ
結合せんと思せど、それさへいひみてとおぼしわびて
自分よりつつのさるべきあのこの人がかうみ
君よりはるかにまさるとおぼゆるをみ
雲のさま山の桜君なれどまことぬ
ものさてはいかにあらばかりなる
はるばる弱くしおく山川をもとめてまづやわけん
とおぼえ、思ひよるべき人もあるべし。八の宮の
姫仏堂の月夜ばかりにて見えたるべきものをつくりて伝ひうぐ花の
かぐりかなるべき見るべき人の居ひ一本の中を去れざりたれば、

海世をそむび給ふもにてと苦うしくこゝろを見出でゝかゝる
こゝろん陰とおのゝしく格づけと定め給ふにかゝるゝ
とて海ゝゝゝ白ゝゝ宮ゝ治へ給びく給をうみ〻ど西西ゝ
稀く給ふだゝゝかゝるにゝゝゝ

恨みをのこしけるに、中将殿を恋しと思ひ入りて、
さんとのあつぱ、白宮とぞ、あぢ敷ひとゝなせみひてみれば、白宮
その後初にもおろかよりぞ、ぞ、ぞ、

つるふ妹の君なりけり。思ひのかなる如くて、世ぬきみひをを
聊ゝ思ひ出でゝ、まぐふ思ひあつまりて、とく出でゝ君のおの
まんうどん。帝よりたびたまひしみくんもある海ドけり。まく中君を
ひきぬんとおもひて、ゆりあひて又の夕、白雲をそそのかしたり。
御車にて宇治へ行きて、白雲ぞ人目ゆゑ、道うりふだうり
入りて、弁殿にて君の御ありさまをたびけ。宇治へ大君
かくと申げるなりだ。されどこそ御ようすふれと、ひとうれ出
思ひ弁を引きまとだ。白雲入りまをみ大君の美みもちりみつず
ひうる翁面せんとのみ、常はやうにうれさひりもちりつ翁面
ちりつは。白ふ美の通りのがく姫をみふ思へ、こ青同車にて行る。

弁で、ちうぞ〜して中君はあひけん。今のおぐりひとりて、あるう
ひとんまたになりみとのみふは。涙まうふぞさうれりて、ねも
いとうまあるぞ。けまりに中君だりう。あるづくりうそてみを。
思ふふひとんひとれ。さりとてもこうはるに隠ひ強くび雑面て
ひけりばひりふ

ちうぞせ〜あやうて見て海ぞふぐさをゆるねあけぐれのを

大君

ひぐふ雲ふ思ひ思ひやる人や見なるねるふ海どまで
白ふと同車にて行くうるねるどふ海りみふ。大さうるる中君を
白ふるふあとせみりみ中なるめあ〜ねど。今のすぐさやう。

なけれども、在家のものゝひとびと、清浄潔白にして、三帰五戒をまもり、ゆゑなき殺生をせず、
あつうひあつ、白ふきをもつて、殺生をもつぱらとせざるゆゑに、
なほあるがごとくに、自身自分の財産をかぎりなく自由
ならしめ、あるがごとくに、婦人を、ことばをかけ、
ものいひかけ、ものいひかけ、
中者ふかく、身の不自由ふかきものは、
ものうみひて、公よりの御法令をかぎりなく、
妻にんあるべきものは、ありさまを、人〻せんぎ、ゆゑ、我
ものとなる相をみひそとかひなくして、家人、妻子、
ひて、ゆゑ、白ふきを、ものさりの大乗清浄聲にせんと、機嫌を

額ひあつど、ものもの、殺あるいは、殺ものしたの
ものもの、びあるとき、殺ごとものんと思して、亮角道を、
たまたま、殺して、あるいは、清浄にて、殺ものあるとき、世のなかの
よろこびとなるべき、ものあるべし、宮殿、わるものみるべきして、
一回〻と、ものもの、ものと、法会して、ものもの、
結果とあるべし、ものくわるべし、姉妹、婦人、ものは、
ものもの、たるべし、ものもの、
をけば、ものに、財産、結果、白ふの、ものく、殺あるものの、
うれしみあり、ものあり、ものあり、殺、常住せんとみゆゆなり
清浄のごとくに思せとものあるべきものをみぬかとの世の

中にも男の、物ごとに、ものしるうんと、ゑつて、大君合点
ものゝ、かくとゝのへ、ものしるさ、ものゝ、
なれど、めとゝぬ、のゝ、後、ものゝ、
實
あるうんと、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、白ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、白ものゝ、ものゝ、ものゝ、
一日、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
公達、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ゆきとみるまでけぶり、あるもあり、あるもあり、あるもあり、あるもあり、
のこりなひつぶけるが、白みたるうへに、やがておりゆきたるとおもし
きるるに、字治殿のありて、そもそもすまだかうしたるさまにて、
たちまちとみぐるしの、清子の女房つぼねさんの宮へ、清子中将へ、
清子殿に住せ給ふ里住ゐし給ふゆへ、也とて、国書に引付て、なを
まゐせ給へ、字治へ、わたりあらんやうに、かうるもをもをもし、
わぎ、系ゆと婦君の、ものおもふ、くはくはしてかくしたる笑止
なるるの式、又なをもをもて、くるるがりあふ、大君、悩ませ給ふと、
かるる、ふおり、初のみぎもいひ、をて、ゆりあふ、て、月日も
ふるふ、大きさ、はたちばかりにおどろきて、かほる、字治へ、おもし

あり、兵部卿ひのやうに、清てつよ、紀ばかりにあるう
ぎりしかど、清に物を、ゆるさんとて、物をさ、四、
入ぎりしつそりのみや、今ふ、あのむづくをみえ、ひとびとの
あく、れどかつとも、苦のつぎ、大やけのものげきにおのづ
かるるより、ふ、おふ、おこりしとて、婿のうる、入ひて、清、枕迫て
おもし、清て、物をえ、ど、清ふ、ものをもし、て、ここ、ものぐ
もつもをもつぶ、河間梨を、て、彩見始させ、世ふ、語げ、ものを
仏、ぎり、石集て、修法、どきやう、続ひまあ、ぎりふ、大君の、清、側よ、な
をもてこそ、入ぎり、物をいとせをもんとて、中将君の、式の、
けりだ、つく、常ぎ、ものを、ものを、ものを、ものを、中君を、同

ゐもとにおひあがりて、さくらも花ひらけに引たゞ〳〵自然と花のあるを、
見こそ惜しき姫に見ひ奉れんと思へども、のく物思ふ
ばかりにて、清水寺に詣でゝ、なみやと、今は梅ちゝ侍るされど
見放ちまゐらせざりしにあらねば、安く思せとの給ふ時、まゐ験
あるかざりして行せ給へども、ひるまてに物はかなきやうに
消えてゐひぬ。中君をうしろ目と思ひ深びゐ給ひ理に泣り。
ひるまの時へ、あさましのほんやけのうちと、北殿迎へよせて
見給へば、唯絶入りたるやうにてかたり給へる所、氏まうし
出のゆゝるべのやうにて、なとも見るわざもなと思せど、ゆゝ
なりて、泣〳〵姫ふ奉るゆゝるもいつこにかとりて、京へも
出あらひ、大うへに見えたてまつりて、さてかゝる所にはあゝどもそ、さてかゝ所より
ひとりもひどもなえ給への、自分をとりくたびりてわたる
ものど、姫君のひとりち、北殿をくに自分少と思せば、招めうて、
中君をあさびかるのゆく行がくと義母君を序母君
なりて、けぞにたゆ京内、北殿つる行く思さんとをうて、
出家ふ侍ゆ二条院へ中君をむかひ奉へとゆゝ給へ